

2021. 5. 16 (日) マタイ24:45~51

24:45 ですから、主人によってその家のしもべたちの上に任命され、食事時に彼らに食事を与える、忠実で賢いしもべとはいっただれでしょう。

24:46 主人が帰って来たときに、そのようにしているのを見てもらえるしもべは幸いです。

24:47 まことに、あなたがたに言います。主人はその人に自分の全財産を任せるようになります。

24:48 しかし彼が悪いしもべで、『主人の帰りは遅くなる』と心の中で思い、

24:49 仲間のしもべたちをたたき始め、酒飲みたちと食べたり飲んだりしているなら、

24:50 そのしもべの主人は、予期していない日、思いがけない時に帰って来て、

24:51 彼を厳しく罰し、偽善者たちと同じ報いを与えます。しもべはそこで泣いて歯ぎしりするのです。

<説教>

主イエス・キリストが二度目の到来（再臨）をなさるのは〈思いがけない時〉であり、それが〈いつの日なのか、あなたがたは知らない〉、だから〈目を覚ましていなさい〉、〈用心していなさい〉とイエスは私たちに言われます。

私たちが主の再臨に〈用心〉し、〈目を覚まして〉いるとは、神の子〈光の子ども、昼の子ども〉（Iテサロニケ 5:5）として歩み、主に対する〈信仰と愛…望み〉（同 5:8）をもって主が来られるのを待ち望むことです。

〈その日、その時がいつなのかは、だれも知りません。天の御使いたちも子も知りません。ただ父だけが知っておられるのです（マタイ 24:36）。

だから天の父なる神がお定めになった日、その時が来たら、そのとき人間の方がどんな状態になっていても主イエスは来られます。

決定権、主権は人間の方にではなく神にあるのです。

人間の方がどんな状態になっていても、と言いましたが、そのときどんな状態であるかはイエスが予め教えてくださいました。

それは、〈偽預言者が大勢現れて、多くの人を惑わし…不法がはびこるので、多くの人々の愛が冷え〉（24:10,11）ている状態です。

〈偽キリストたち、偽預言者たちが現れて、できれば選ばれた者たちをさえ惑わそうと、大きなしるしや不思議を行います〉（24:24）ともイエスは言われました。

「そのため、やはり多くの人々が偽キリストたち、偽預言者たちに惑わされ、信じてついて行く」とイエスは暗に言っておられるようにも思われます。

〈ノアの日〉のときと同じように、多くの〈人々は食べたり飲んだり、めとったり嫁いだりし〉（24:38）ている状態です。

使徒パウロは〈人々が「平和だ、安全だ」と言っている〉（Iテサロニケ 5:3）状態だと言っています。

世の中の多くの人々がそんな時流に乗って（棹さして）いる状況の中で、そんな“世間”の人々が見ている中で、〈目を覚まして〉〈光の子ども、昼の子ども〉として〈信仰と愛…望み〉をもってイエスが来られるのを待ち望む生き方、在り方とはどんなものなのか、

イエスはたとえをもって教えてくださいました。

それは〈主人によってその家のしもべたちの上に任命され、食事時に彼らに食事を与える、忠実で賢いしもべ〉としての在り方です(24:45-47)。

〈主人〉とは主イエス・キリストのこと、〈忠実で賢いしもべ〉であるように命じられ、期待されているのはキリストの弟子たち、信仰者たち、私たちのことです。

〈忠実〉は、〈主人〉が〈しもべ〉に要求する一番大事なことです。

イエスは私たち、教会に「死に至るまで忠実でありなさい」(黙示録 2:10)とお命じになります。

そして〈賢い〉ということも単に頭がいい以上のことです。

既に「わたしのこれらのことばを聞いて、それを行う者はみな、岩の上に自分の家を建てた賢い人にたとえることができます」(7:24)とイエスは仰っていました。

更にその前には「わたしに向かって『主よ、主よ』と言う者がみな天の御国に入るのではなく、天におられるわたしの父のみこころを行う者が入るのです」(7:21)とも仰っていました。

このように、〈賢い〉しもべとは主人のことばに聞き従って、主人の意思を行う者だとわかります。

またイエスは既に弟子たちに、こうも言っておられました。

「いいですか。わたしは狼の中に羊を送り出すようにして、あなたがたを遣わします。ですから、蛇のように賢く、鳩のように素直でありなさい。人々には用心しなさい。彼らはあなたがたを地方法院に引き渡し、会堂でむち打ちます。また、あなたがたは、わたしのために総督たちや王たちの前に連れて行かれ、彼らと異邦人に証しをすることになります。人々があなたがたを引き渡したとき、何をどう話そうかと心配しなくてもよいのです。話すことは、そのとき与えられるからです。話すのはあなたがたではなく、あなたがたのうちであって話される、あなたがたの父の御霊です。兄弟は兄弟を、父は子を死に渡し、子どもたちは両親に逆らって立ち、死に至らせます。また、わたしの名のために、あなたがたはすべての人に憎まれます。しかし、最後まで耐え忍ぶ人は救われます。」(10:16-22)

ですから〈賢い〉しもべとは、〈仲間のしもべたち〉(24:49)から、また周りの人々から何を言われようと、憎まれようと、迫害されようと、〈主人が帰って来〉(24:46)るまで、最後まで忍耐強く、主人から命じられ委ねられた務めを(聖霊の力によって)果たす者だということができます。

自分が主から与えられた持ち場、立場で、主から与えられた任務を地味に、平凡に、忍耐強く、喜びと感謝をもって忠実に守り行うのです。

〈主人が帰って来たときに、そのようにしているのを見てもらえるしもべ〉(46)とは、主人が見ていても見ていなくても、主人がその場にいてもいなくても、主人から命じられた務めを忠実に果たすしもべでしょう。

そんなしもべの〈忠実〉さは演技ではない、見せかけではない、つまり〈偽善〉ではありません。

そんな〈忠実で賢いしもべ〉に主人は〈自分の全財産を任せる〉という恵みをもって報いてくださるとの約束をしてくださいました。

その一方、「主のしもべ」のはずだったのに〈悪いしもべ〉となり、ついには主から〈厳

しく罰)せられ、〈偽善者たちと同じ報いを与え)られ、〈泣いて歯ぎしりする)者がいます(48-51)。

『主人の帰りは遅くなる』と心の中で思)う(48)ことがこの〈悪いしもべ)の始まりです。

『主人の帰りは遅くなる』と心の中で思)うとは事実上「主人が帰って来ることなんか無い」、「主人が帰って来ると言っているのは嘘だ」と思うことです。

主人の言葉を信じないこと、すなわち不信仰によることです。

そんなしもべは、主人がいた時も主人がうっとうしく、嫌々ながら渋々主人に従っていたのでしょ

う。主人が出かけていなくなってしまった、当分いやもうずっと帰って来ないとなればもうこっちのものだ、ということでしょう。

彼はしもべであり、主人ではないのに、まるで主人であるかのように高ぶり、〈仲間のしもべたち)をまるで自分のしもべのように〈たたき始め)ます。

彼は主人の名を語り、主人ように演技する〈偽善者)となります。

自分の主は自分であり、自分の「欲望を神とし」(ピリピ 3:19)、主人として自分の欲望のままに振る舞い〈酒飲みたちと食べたり飲んだり)します。

そういう人は「地上のことだけを考える者たち」であり「その人たちの最後は滅びです」(ピリピ 3:19)と使徒パウロは言います。

それと正反対なのが、主イエス・キリストとそのみことばに信頼し、天から「主イエス・キリストが救い主として来られるのを…待ち望んで」いる(ピリピ 3:20)人たち、私たちがな

のです。その日、その時がいつなのかだれも知らない以上、その意味で主イエスの再びの到来は確かに〈予期していない日、思いがけない時) (50)です。

しかし私たちはそれで不安や不満の中でイエスの到来を待つものではありません。

同時にこの世の多くの人々が「平和だ、安全だ」と言う、そういう偽りの平和、安全には用心し、惑わされないようにしなければなりません。

偽キリストたち、偽預言者たち、反キリストには抵抗し、戦わなければなりません。

そのようにしつつ、それぞれが主によって召され置かれている場で、決して消え去ることがない主のみことばに聴きつつ、主から委ねられた任務を地味に、平凡に、忍耐強く、喜びと感謝をもって忠実に守り行うのです。

畑に行くべき者は畑に行き、臼をひくべき者は臼をひき、食事時に食事を与えるべき者はそうするのです。

そのようにしてそれぞれが主の目に〈忠実で賢いしもべ)として主の栄光を現し、主を証しするのです。

このたとえの場合は、主人は人間であり、〈その家)にいない時は確かに自分のしもべのやっていることは知りません。

しかし私たちの主イエス・キリストは今父とともに天におられ地上にはおられません。が、今は父とともに聖霊を送ってくださっており、みことばと聖霊によって私たち主のしもべを支配し、助け、導いていてくださいます。

私たちは、その主の善きみこころに全く信頼して、目を覚ましているのです。